

氏 名 横 田 則 子

学位（専攻分野） 博士(学術)

学 位 記 番 号 総研大甲第285号

学位授与の日付 平成9年9月30日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 日本近世社会と病

—癩医学の展開をめぐる—

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 笠谷 和比古

助 教 授 井上 章一

助 教 授 栗山 茂久

教 授 酒井 シツ（順天堂大学）

助 教 授 白杉 悦雄（東北芸術工科大学）

(論文審査結果)

本論文は、日本の前近代社会、特に徳川時代の社会において「癩」という病気がどのように認識され、どのような医学的な対応がなされていたかを、中国医学およびそれを受容しつつも独自の仕方に変容させていた日本医学の医学的概念の史的展開の過程に跡づけ、そしてさらにその医学的概念そのものの生成を、社会の構造的特質やそれに対応する社会の一般通念、俗信との関係性の中に位置づけたものである。

本論文の提起した論点を整序するならば以下の通りである。

第一は、「癩」という病気を通してみた中国と日本との疾病観の違いという問題である。中国医学がその病因を説明するために用いていた風・気などの抽象的な概念は、日本医学の中では風土や血液といった具体的で即物的なそれを取って代わられる。一方では中国医学を積極的に導入しながらも、他方ではその過程において日本的な解釈替えが病因論の最も根本的な局面にまで施されているということであり、これは医学理論の受容と変容という問題を通して、文化移入に伴う日本の変容の特質を解明していくうえでの重要な示唆を与えることとなっている。

第二には、日本近世の病因論においては血を媒介とする親子間の伝染に関する議論への強いこだわりが顕著であるとする点をめぐる指摘である。これは治療法としての瀉血法に対する過度の依存という現象とも対応しているのであるが、この「癩」の病因として血を過度に重視する態度は、日本の近世社会における「家」の一般的成立という社会構造上の変動およびそれに随伴する「家筋」の観念の形成と相即の関係にあるとする分析である。この視角は、本問題を狭義の医学史ないし医学概念史にとどめることなく、これら医学的な知の発展を社会史のパースペクティブの中に再構成していったという点において、医学史研究に新生面を切り拓くものと言ってよいであろう。

そのことからして第三の問題として、「癩」をめぐる社会的偏見と医学理論との関わりが指摘される。医学的な物の見方、日本近世における「癩」をめぐる医学理論の発展の中に浸透していく社会通念の影響と、医学理論の権威による社会的差別の増強とその正当化の諸相が本論文の随所において摘出される。

本論文は以上のように、「癩」という病気を主題として、それをめぐる中国医学とそれを受容した日本医学における医学概念の展開を精緻に跡づけ、近世日本医学の特質を析出するとともに、それにとどまることなく更に、当該社会の構造特性やそれに随伴する社会通念・俗信などとの関係性といった社会的視野の中にこれを位置づけ再構成していったところにその独創的な意義を見いだすことが出来るであろう。

もとより、本論文におけるような議論が、癩痢や結核といった類縁的な自余の疾病をも考慮に入れてなお成立ちうるのかという疑問、あるいは外国の学術的概念の日本的解釈替えの特質として指摘された問題についての掘り下げの不充分さといった難点は免れえない。

しかしながら、それらは今後の研究課題としたうえで、本論文はその実証性の高さと構想力の豊かさにおいて、医学史研究の発展に寄与するところ多大であると判断し、審査員一同は本論文に対して学位授与を可とする旨の結論に達した。

本稿は、日本の近世社会の中で、癩という病がどのように認識されていたのかを、癩医学の展開を分析することを通じて明らかにしていくものである。

癩は世界史的に、差別的なまなざしと処遇とを受けてきた病である。それは単に病状の醜さや身体障害、不治といった病理的な要素だけによるのではない。むしろ長い歴史のなかで堆積されていった様々な偏見が、この病を一層悲劇的なものにしてきた。

だが癩病観は、実際には単に「差別的」という言葉によって、ひとくくりにしてしまうことのできない違った特質を、それぞれの社会によって持っている。ひとつの疾病に対して、それぞれの社会が、ある面では重なり合いを見せながらも、総体としてみるとときには違った印象の疾病観を形成するのは、病にたいする考え方が形成されるにあたって、その社会が持つ様々な要素、すなわち道徳観・身体観・労働観などが複合的に作用しているからである。

本稿は、日本近世医学に大きな影響を与え続けた中国医学の受容のしかたに注目することによって、日本の癩認識の特徴を際立たせることをめざした。同じ医学的土壌を持つ社会が、まったく異なった印象の癩病観を形成していく背景には、日本近世社会の病や身体に対する考え方が独自の展開を遂げていく過程がある。

本稿は次のような構成を取る。

まず序章において、本稿の分析視覚と日本の癩の歴史に関する研究史を確認した上で、医学書を歴史史料として扱うことの意義について論じた。

1章においては、近世の人々にとって癩とはどのような病をさすのか、という問題を確認する。癩は現代医学のいうハンセン病よりも多様な表情を持ち、研究対象として明確な輪郭を持たない病である。そこで癩の多様な名称やことわざ、医学書や絵画史料などから、どのようなものが癩と認識されたのか検討する。またその過程で近世人の癩にたいするイメージの特性を明らかにしていく。

2章以下は癩にたいする様々なイメージが形成されていく過程を、具体的な医学の変化を軸に検証していく。

2章では、日本医学に強い影響力を持った中国医学の癩の病因論、治療法などについて、その大まかな歴史を確認する。その上で16世紀から積極的に中国の新しい医学を摂取し始めた日本の医学の動きを、初代曲直瀬道三の著書を通じて見、さらにこの時代の社会一般の癩医療と癩者の実態を、日記や切支丹関係の史

料から検討する。

3章・4章は、近世社会の本格的展開を迎える17世紀後半以降について論ずる。中国医学は癩の病因として、特に三つの要素を重視した。それは外因である風・「伝染」と、外邪の影響を受けやすい体の状態を作る不内外因としての、食べ物や房事である。3章ではこれらのうち、風と食べ物・房事についてとりあげ、4章で「伝染」に関連した問題を検討する。

3章でみる風は、中国医学の中では病一般においても最大の病因と考えられてきた。だが日本は風という抽象的なものではなく、より具体的な風土として理解した。また食べ物や性についても日本は中国医学の理論に独自の解釈を与えていく。ここではそういった中国医学の受容のしかたを具体的に検討するとともに、風土・食べ物・性が癩にまつわる新たな偏見を生んでいったことを論ずる。

4章では日本近世の癩の病因論のうち、もっとも重視された、癩を「家」に伝わる病とみなす発想と、その発想を支えた血をめぐる問題について考察する。癩の「家筋」認識は医学書・文学史料ともに、17世紀後半以降顕著となる。中国ではある時期から癩を激しい伝染病とみなしたが、日本では「伝染」の範囲を親族間に限定して考えた。さらに日本の癩の「家筋」認識は、親と子をつなぐものとしての「血」と結びつく。日本社会の「血」にたいする強いこだわりが、「血」の排出によって治癒をめざす18世紀後半以降の瀉血治療の流行と、深くかかわっていく過程を論ずる。

終章においては4章までに明らかにした諸点をふたたび確認した上で、風土・食べ物・性・「家筋」・「血」といった様々な問題が、全体としてどのような問題を示唆しているのかを検討する。すなわちひとつには、医学史研究のあり方の問題、二つめには近世社会の近代化がもたらした負の側面について論ずる。